

英国王立防衛安全保障研究所（RUSI）
日本特別代表

秋元千明

ジャーナリストからシンクタンカーへ 地政学の視点から日英同盟を進める

——秋元さんはご自身のキャリアをNHKで始めました。そもそもジャーナリスト志向だったのですか。

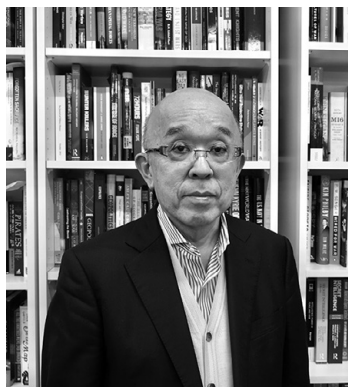
秋元 そういうわけではないのですが、大学時代は西洋史、特にナチスドイツの独裁政治や軍事戦略などに関心がありました。加えて飛行機や船が好きな軍事オタクだったので、軍事関係の記者になったかった、というのがNHKに入った動機です。入局後三年間徳島で事件記者を経験したのち、四年間沖縄に駐在しました。この沖縄での経験がなければ、今の私はなかったと思います。

——詳しく教えてください。

秋元 米軍の最新鋭の戦闘機を目にすることができて、沖縄の置かれた厳しい現実を思い知らされると同時に、軍事

好きとしてはたいへん充実した日々でした。

赴任中、米軍の取材をする中で最大の事件は、一九八三年の大韓航空機撃墜事件でした。その頃の私は、毎日嘉手納基地のすぐ外側にある丘の上から駐機場を眺めるのが日課でしたが、ある時、戦闘機の格納庫がほとんど空になった日がありました。何かあったに違いないと思うものの、当時駆け出しの私は何もわかりませんでした。実際は、米軍は事態を受けて緊急体制をとり、当時沖縄にあったF-15戦闘機の約半数以上をロシアに近い青森県の三沢基地に移動していたのです。後に報道でその事実を知り、沖縄の米軍基地は世界のどのような出来事にも迅速に対応するのだと肌で感じましたし、その厳しい現実には自分が記者とし



あきもと ちあき 1979年早稲田大学卒業、日本放送協会（NHK）に入社。軍事・安全保障を専門とした国際部記者・解説委員として活躍。2012年にNHKを退職し、RUSIアジア本部（RUSI Japan）所長に就任。19年特別代表。著書に『最新 戦略的地政学』『復活！日英同盟 インド太平洋時代の幕開け』など。

て接していられることに、責任感を感じるとともに、ある種の感銘を受けたことを憶えています。

——その後、秋元さんはNHKの国際部に移られました。

秋元 冷戦が終わるかもしれないという時代の雰囲気なのか、東京の国際部に移り、軍備管理などに関する取材を行いました。一九八九年にベルリンの壁が崩壊して冷戦は終結しましたが、今度は湾岸戦争やユーゴスラビア紛争と、地域紛争を追いかけることになります。米国での勤務も経験し、イラン・イラク戦争の際はニューヨークの国連本部、湾岸戦争直前には国防総省を担当しました。そして九三年、ちょうど海外勤務の疲れがたまってきた頃、一年半ほど英国王立防衛安全保障研究所（RUSI）に客員研究員として招かれました。

初めて触れた、日本と異なる「知の循環」

——イギリスでの生活はいかがでしたか。

秋元 キングス・カレッジ・ロンドンの戦争学大学院で勉強するなかで驚いたことの一つは、イギリスでは軍事が学問である、ということでした。ある日、イギリスで最大の書店に安全保障の本を探しに行った時のことです。日本だとそんなジャンルは書棚の片隅に少しあるだけですが、そ

こではワンフロアが使われていました。しかも「ミリタリー」という大雑把な括りではなく、インテリジェンス、ナポレオン時代、海軍史……と細分化され、新旧の研究書がたくさん並んでいました。軍事や安全保障が立派な学問として成立していることに深く感銘を受けました。

RUSIには、政府・情報機関関係者や研究者、ジャーナリスト、一般民間企業の調査担当者など幅広い職種の人たちが集い、そこで行われるディスカッションはたいへん刺激的でした。これは英国の特徴でもあるのですが、軍事やインテリジェンスの「業界」に身を置く人たちは、ずっと同じ組織に属すのではなく、政府、民間企業、報道、研究機関を横断的に転職を重ね、キャリアを積んでいきます。常日頃から人的交流が盛んで、お互いの組織のこともよくわかるので、RUSIには正確な情報が早く集まる。そのような知的環境に身を置くうちに、軍事オタクと研究者の違いを意識するようになりました。細分化された専門性を突き抜けたい、本当の意味で研究者、専門家になりたい。強くそう思うようになりました。

——その後NHKに戻り、解説委員に就任します。

秋元 まだ四〇歳代の初めで、当時おそろくいちばん若い解説委員だったと思います。一〇年ほど経った頃、たまた

まRUSIの所長と話す機会があり、その時「これから世界が変わる中で、地政学的によく似た日本とイギリスは必ず同盟関係に向かって動く。だからわれわれの研究に力を貸してくれないか」と誘われました。とても嬉しかったですね。その後、ウインザー城に招かれて正式にオファーを受け、二〇一二年にNHKを退職し、RUSIに加わりました。

急速に進んだ安全保障分野の日英協力

——改めて、RUSIとはどのような組織ですか。またその中で秋元さんはどのような役割を担っているのでしょうか。

秋元 RUSIは一八三一年に設立された、一九〇年の歴史を持つ防衛・安全保障分野を専門とするシンクタンクです。二〇一二年、RUSIがアジアに拠点をつくるために、RUSIジャパンを東京に開設しました。そこで私が代表に就任し、日本と英国の安全保障関係を単なるパートナーの段階から同盟の段階へと引き上げるため、両国の安全保障コミュニティの関係強化に取り組んできました。一九年にはそれまでの地域本部から日本特別代表部に格上げされ、活動を強化しています。

——日英同盟と言われても、当時はあまりピンとこない人

が多かったと思います。

秋元 まだインド太平洋という地域概念が生まれる前ですが、世界の政治経済の中心がアジアに移行し始め、その中で中国が大国としての存在感を示し始める。そのような状況下で、アジア太平洋の持続可能な成長と安定をどのように確保していくか、地政学的に考えた時の一つの答えとして、RUSIは早くから日英同盟を考えていました。イギリスは欧州連合（EU）離脱によってこの地域に目を向けるようになったのではなく、以前から注目していたのです。イギリスはヨーロッパがEUによって一つの帝国のようになるべきではないと言いつづけていました。イギリスは変わったのではなく、元の姿に戻っただけなのです。

——秋元さん自身も、日英協力の進展に関わってきました。

秋元 二〇一二年、当時は野田政権でしたが、キャメロン首相が訪日した際に、防衛・安全保障分野における日英協力の促進に合意しました。米国以外とそのような関係を持つのは画期的だったし、これがその後の日英協力の下地になりました。安倍首相もこの動きに関心を持ったのでしよう、政権が発足した二二年二月、チェコに本部を置く言論機関プロジェクト・シンジケートで、欧州、特に英国との関係を重視する論文を発表しました。それを受けて、R

USIは翌一三年一〇月に、初めての日英安全保障會議を東京で開催しました。私が中心となって進めたものですが、両国間の専門家が意見交換する場を提供できたこと、それが現在も続いていることは嬉しく思います。これを境に、自衛隊と英国軍との共同演習などが定期的に行われるようになりました。

首脳レベルでも認識が深まっています。一七年にはメイ首相が来日し、日英安全保障共同宣言を発表しました。これ以降、英国が公式に日本をパートナーではなく同盟国(alies)の一員と呼ぶようになりました。昨年の空母クリン・エリザベスの日本来航はその集大成の一つであり、いまや両国は円滑化協定(RAA)、事実上の地位協定を議論するまでになりました。次期戦闘機の共同開発も計画されています。英国のグローバルな戦略観と、安倍政権で展開された「自由で開かれたインド太平洋」への戦略とが、うまくマッチしました。米国とのような同盟条約があるわけではありませんが、シームレスに同盟関係が進化しているといえるでしょう。

——ロシアによるウクライナ侵攻を受けて、世界は大きく変わりつつあります。日本外交にとって何が重要になると考えますか。

秋元 インド太平洋が世界の中心となる流れは変わらないでしょう。ウクライナ侵攻でヨーロッパを脅かしているロシアは中国との関係を深め、その中国は日本の隣国です。ヨーロッパはロシアの先に中国を見ているし、そうなれば必然的に日本を頼りにするようになります。それは日本も同じです。ロシアがヨーロッパで何をしているのかを知らなければ、例えば中国が台湾を侵攻したときに対処できません。いまやヨーロッパとアジアは融合しているのです。イギリスは、インド太平洋の状況にに応じて複数の安全保障の枠組みを重層的に発展させていくはずですが、その中で日本は重要な「同盟国」です。日本としても、インド太平洋を日本外交の中心となるアリーナだと認識し、アメリカだけでなくヨーロッパにも目配せしながら、この地域の発展に貢献してほしいと思います。

ミクロな視点で一つ付け加えると、日本はインテリジェンスを重視する姿勢が圧倒的に欠けています。同盟国との安全保障協力を進める上では不可欠の要素であり、対外情報機関の設置などを含め、制度的にきちんと整備する必要があります。そのためには、官民をまたぐ広範な人事交流なども考えるべきです。日本の組織文化に反することかもしれませんが、真剣に検討すべきでしょう。●